

銀塩夜想曲

孔雀 #5

辺りはいつそう暗く、ときおり外を往く車の灯りがガラス越しに差し込むと、たくさんの写真機を背にした少女がシルエットに変わる。髪の毛の輪郭がまばゆく輝き、桜色の頬は沈む。そうして陽画ポジティブと陰画ネガティブが何度か入れ替わったとき、少女はふいに口をひらいた。「鳥がしっぽをひろげるのは、なぜだか知ってる?」「尾をひろげる鳥……クジャクのことかな」「うん。あれはね、ひとが見つめるからなんだって」「それ、誰に訊いたんだい」まさか鳥におそわったわけじゃないだろう。そう言い返そうとして、僕は言葉を飲みこんだ。

「どうしたんですか、暗いなかで」

奥から顔をだした店主はそう訝しげに問うと、カウンターの裏のスイッチを押した。店のなかにふたたび明かりがもどる。

「そのスイッチのありがわからなかったんです」

主人はうなずき、時間がかかって申し訳ない、退屈しただろうと言った。僕は、お客さんと話をして時間をつぶしていたと答えた。

^ 次の頁へ ^



「待ち切れなくて帰りましたよ。ちいさな女の子で、今日の夕方に出て来る写真を取りに来たといっていました」

店主は表情を変えずに、その子はいままでここにいたのか、と言葉を返す。ええ、ついさっきまでその椅子に座っていました。

「妙だなあ。きつと間違いでしょう。この店ではもう現像を受けていないんです。それより、あのフィルムはとっくに期限切れですよ。それで感度が出てないものだから、プリントは苦労しました」

僕はタバコに火をつけ、おおきく吸い込む。

「プリントは出来そうですか」

「一枚だけどうにか。色は濁ってますが、服の色はわかるでしょう。いま水洗いをしているところです」

店主はそう言ってふたたび店の奥に消える。僕はタバコの煙を吐き出して目をとじ、先ほどの会話を思い出す。

「カメラを向けたら、クジャクはどうすると思う」

少女は僕の問いにちいさな笑みを浮かべ、首を横に振った。結んだ髪がほどけ、赤い服の肩にはらりとかかる。外を車のライトが行き過ぎ、僕が知っている女性の面影があらわれて消えた。

(以下次号)

[^ 前の頁へ](#)
[v](#)

